

漢字には、<sup>おん くん</sup>音と訓とあるのが普通です。音とは、漢字が日本に取り入れられた時の中国読みのことであり、訓とは、その漢字にあたるわが国の言葉のことです。

たとえば、「花」という漢字は、中国では「カ」と読むので、「カ」が音です。「造花」<sup>ソウカ</sup>「花瓶」<sup>カビン</sup>という使い方がこれです。ところが、この字は、わが国では「はな」という言葉にあたるので、「花」を「はな」と読む読み方が生まれました。これが訓です。「花見」<sup>はなみ</sup>「草花」<sup>くさばな</sup>という使い方がこれです。

中国は、広さから言えばヨーロッパ全体に匹敵する広さがありますから、同じ漢字でも、その地域によって随分違った発音をします。また長い年代にわたって日本に入って来ましたので、一つの漢字にいくつもの音がある漢字があります。また、漢字によっては、わが国のいくつかの言葉にあたるものもありますので、一つの漢字でいくつもの訓を持った漢字もあります。

たとえば、「下」という漢字は、「地下(チカ)」「下水(ゲスイ)」「下町(したまち)」「川下(かわしも)」「<sup>くだ</sup>下る」「<sup>さ</sup>下げる」「下(もと)」など二つの音と五つの訓とを持っています。

「チカ」という音は、漢音と言います。これは、わが国が、中国と正式に国交を結ぶようになって、唐の国都長安の標準的な発音を取り入れたものです。漢字の標準音という意味で「漢音」と呼んだものです。聖徳太子の時代から、平安朝初期にかけてでき上がりました。

「下水」<sup>ゲスイ</sup>という音は、呉音と言います。中国と正式な国交を結ぶ以前、仏教などの経典と共に取り入れた音で、仏教に関係ある言葉やその他特別の使い方が多く、漢音に比べると、数は少ししかありません。揚子江の下流地方を「呉」と呼びますが、この地力の発音なので、「呉音」という名称があります。

ずっと後になって中国の「明」「清」時代の発音で読まれるものも、極めて僅かですが、あります。

これを唐音と呼びます。これは、中国人のことを、「唐人」と呼んでいたためかと思われま。す。「実行」<sup>ジツコウ</sup>「行進」<sup>コウシン</sup>は漢音、「行列」<sup>ギョウレツ</sup>「奉行」<sup>フギョウ</sup>は呉音、「行宮」<sup>アングウ</sup>「行燈」<sup>アンドン</sup>は唐音です。

これは、同じ album が、英語ではアルバム、独語ではアルブム、仏語ではアルボムと発音されるようなものです。それよりも広大な中国のことですから、発音が複雑になるのは止むを得ないことです。